

キャリアパス；愛、不安、迷い、別れ、別れた後、出会い

「愛」をする君たちへ
最近、To have or to be (Erihh Fromm, 1976)を読み返したところ。
愛を思うに。 制御不可能な出来事は言うだけ蛇足。 悲しいのは愛ではない。 ときめき、眠れず、息が苦しくても、 秋晴れの空気のように骨髄を駆け回る。それが愛の状態。 よって、症状は愛ではない。 状態ははっきりしているのだが。
対象は。 私を愛する人ではなく、私が愛する人と歩む。 自分ほど不確実性の多いものないが、相手はそれをはるかに凌ぐ。 -1から+1の変化で正解はないが、違い2を避けたかった。 だから消去法で決めたことだ。
読み返しながら思うに。 to beとは隣でなく、今でもなく、これからでもなく。 自己中心の修飾語が満たされないことで、 所有(to have)は、悲しみをもたらし、続けさせ、より大きく、深くしていく。 だからこそ、 ただ、「いる」だけ、「いた」だけを愛すること。 いるなら、隣にいるが、これからもを愛さず、いまを愛さず、いるを愛する。 いたなら、隣にはもういないが、いたを愛する。 いてくれるを、 いてくれたを愛さず、いるを、いたを愛する。 自分であれ、家族であれ、他人であれ、専門であれ、場所であれ。
若い自分を愛するは、若いが前提で、 愛の対象は若さで、存在(to be)ではない。 愛される人を愛するは、愛されるが前提で、 愛の対象は愛されることで、存在ではない。 愛する人を愛するは、愛するが前提で、 愛する対象は愛することで、存在ではない。
私を愛する人ではなく、私が愛する人と歩むと信じていた。 しかし、それも結局は、私の愛がある限りの条件付きの、醜いエゴ。 私を愛しようが、私が愛しようが、それがどうしたというのだ。 単なる条件付きの取引で、所有で、エゴではないか。 秋晴れのわけがこんなものでは、悲しすぎる。
ふと思い出した古い書物で、 これまで信じてきたことが崩れ落ちた。 変わるものよの。
To have or to be？ 少なくとも、今はto be.
2013年11月9日 DJから DJ 2013-11-09 13:53

試したが君たちへ
丈夫だと書いてあったので、試してみた。 恐る恐る落としてみた。ちょっと高い所から落としてみた。 何気なく叩いてみた。ちょっと強く叩いてみた。 軽く投げてみた。ちょっと投げつけてみた。
ほんの一時の安心に暗鬼が囁く。 「手加減で真実は分らない。騙されているかも。」 本気で落とし、叩いて、投げつけた。
比較することにした。 「先でヒビが入ってしまったらフェアじゃない。」 両方とも新しいものにして、落とし、叩いて、投げつけた。
分かってきたこと。 結果で積み上がる信用は、－1 から＋1 の間で揺れ動くこと。 最初から無謀に始めた信頼は、初期値のままで微笑んでいること。
なのに。 信用が信頼をもたらすと信じ、 どこかで、私は落とされ、叩かれ、投げつけられる。 どこかで、私は落とし、叩き、投げつける。
信頼が信用の始まりであり、砦であり、 信用でけなされないことを知っているがらも。 落としては叩いては投げつけては、 落とされては叩かれては投げつけられては。
この朝に気づいたこと。 ゴミ箱に捨てていたのを愛していたこと。 拾う瞬間、破片で切った指から涙が流れる。 大きく息を吸って、大きく口を開けて、小さく叫んだ。
まだ割れていない実験台、ヒビだらけの代物にバシてはならない。 顔をつくり、笑顔で、優しく語る。 「今日はゴミの日、捨ててくださる？」 割ってしまった自分もこっそり入れて。
君は、 隣で微笑む代物がすでに知っていることを、 隣で眠る実験台が今朝出て行く決心がついていることを、 知らない。
君は、 飾りと契約だけでは、 永遠に愛を守ることができないことを、 知っている。
平行線が伸び続き、 増え続ける君だけのための幸せリストは。 もう燃やすがいい。
2012年11月26日 また愛を失おうとする君に捧げる。
DJから DJ 2012-11-26 03:13

別れを考える君へ
別れがつらいのは知っているつもり。 最初が最後で、最後が最後でないことも。
それでも、飛べないビーターバンがどこかでみる夢は、 最初が最後まで続くこと、これで最後であること。 初めて見る君の涙がそれまでの旅を走馬灯に写す。
旅立つ人のざわめきと残される人の静けさは、初夜だけ。 消え行く残影にしがみついては、新しい景色をもみ消す。 忘れようと眠りを誘っても、見過こした景色が放さない。 旅先の人の折りが、残された人に届くには遠い。 残された人の折りが、旅先の人に届くには弱い。
美しい記憶が忘却に勝ち続ける限り、 曙の橋に咲く菊が、公園の桜が、息を苦しめる。 苦しみの夜明けに、 時間が忘れさせる、星の数ほど、ご縁があれば、でこまかす。
それでも。 君が息苦しく、眠れず、胸の鼓動で騒がしいのなら、 今朝の雨を覚えられず、食が違のき、字が目に入らないのなら。 気がつけば過去の記憶でだけ安らかに微笑むのなら。 それでも君が、散歩先で道を失うのなら。 それはまざれども君の普通。
止まってしまった筆を動かし、 閉じたままの電話を開き、 届かないときあらめた告白を、伝えるべきだ。 ろくでなしではなく、君じゃなければならぬ人へ、 代物ではなく、本物へ、
便りを待たず、暗闇の部屋を後にすべきだ。 自分を許し、相手を許すことだ。 剥がれた爪でも、血まみれの裸足でも、 その泥沼から出て行くべきだ。
汚れてはならん。汚してはならん。 腐っていく傷にではならん。治る傷とすることだ。 汚い泥など蹴り落とせ。 熱いシャワーは君たちの他日を過日にしてくれる。 いまそこにいるバス停は、君の最終目的地ではない。 旅先にすぎない。
戻るがいい。
2012年11月26日 DJから DJ 2012-11-26 03:12

萩小町を憶う君へ
「だまされたのですね」
2009年3月に訪れた萩椿群生林、偶然の祭りで指差した萩小町。 ビニールの鉢と袋が痛ましく、家路の速度計の針は9時前。 大事にね、とやさしいお婆さんを見え、 ビニール袋からすぐ出してあげては、 ビニール鉢から大事に、やさしく、喜びとどこかの佐えで。
4月には、乙女のピンクと激しい紅色を咲かせ、 出かけも帰りも、カーテンの裏から、真上から、真横から。 無用のペランダーにコーヒの香りが日々漂っていた。 翌年の遅咲き。 秋の葉っぱが少なく、心配をしていた。 どれほどうれしかったことか。感謝したことか。誓ったことか。 2年目の震災の頃。 最後のつぼみは開かないまま、 萩小町は静かに、衰えていった。
遅すぎた栄養剤を、日当たりを、ネット解説を、と走り回り、 葉っぱの気配を眺めては、足早く帰ってきて。 春の訪れを待ち、つぼみを待ち、お帰りの挨拶を用意していた。 切り裂かれていく心を必死に隠し続けていた。
炎天下の水やりも、横殴りの風よりも、長い出張からの鍵の音も。 萩小町は耐えていて、待っていた。 最後のつぼみに最後の一滴の血を絞り出して、 手遅れの折りに応えられないことを詫びて、 細すぎる指で心の奥に焦げ付いた種一粒を置き、 枯れ果てた涙で、教えてくれたこと。
美しさには、資格というのがあること。 その資格のない私なんかにも、全てを差し出す愛というのがあること。 その愛には、血まみれの寂しさというのがあること。 最後の一滴の血が流れたら、もう死ぬということ。
どんなに花を咲かそうともがいても、 もうどうにもならない日が訪れること。 決して怒ってはなかったこと。 私の喜ぶ顔だけが全てだったこと。 ごめんなさい、と。 悲しいけれど、もう遅い、と。
「祭りなんかで買うからですよ」 「長持ちするサボテンがいいです」 「手間いらずで、水やりは気がついたときにでも」 「お客さん、ね、お客さん」 「安くしておきますから」 「ね、お客さん」 「お客さん...」
来年の春も心臓を突き抜いた萩小町が咲く。
2012年11月26日 DJから 別れの儀式が始まった日を憶う。 DJ 2012-11-26 03:11